

阪神・淡路大震災から20年

一面ガレキと化した神戸の街は再開が済み、かつての震災の面影は見当たらない。その一方で、「復興」から取り残された被災者も少なくない。阪神・淡路大震災の発生から17日で20年、未来を生きる人に何を伝えるのか。被災者の実態や復興政策の課題について、兵庫県保険医協会の加藤擁一 副理事長に聞いた。

(聞き手／新聞部・南端理伸)

南端理伸

――震災から20年が経った。

街並みは復興事業などできれいになったが、まだまだ震災で苦しんでいる人が多数存在する。復興政策の影響が20年後の現在に表れている。震災復興の物差しは生活再建できているかどうかだ。その点から被災地を見渡せば、まだまだ復興は道半ばだと思っている。

兵庫県保険医協会副理事長 加藤擁一氏に聞く

――いまだに生活を再建できない原因は。

阪神・淡路大震災が発生した時、被災者に対する公的支援はわずかな義援金と復興基金だけだった。歯科医療機関への再建支援もなかった。根底には、当時の政府の「私有財産制度の下では個人補償はできない」とする被災者切り捨ての政策があった。そのため、多くの被災者が二重・多重ロスを抱えており、今も生活に行き詰まる人が少なくない。

――震災を機に被災者への公的支援を求める運動が起こった。

震災1周年を機に協会の呼びかけで県医師会やコップこうべなどと共同し、公的支援の拡充を求めるアピールを発表した。被災地の実情を知った多くの人が立ち上がり、国会議員の過半数の賛同を得るなど大きな運動に発展。1998年の



いまだ残る“復興”への課題

神戸市ホームページ／阪神・淡路大震災「1・17の記録」から。震災直後の神戸市・長田区



被災者生活再建支援法の成立につながった。私たちの粘り強い運動で「個人補償はしない」とする政府の姿勢を転換させた意義は大きい。

――東日本大震災では同法が適用された。

当初は100万円の給付で住宅再建に使えないという制限もあった。その後の改正を経て、東日本大震災では住宅全壊で300万円が支給され住宅再建も可能になった。歯科医療機関への公的支援も実現した。まだまだ

被災者に負担

――被災地の今の課題は。

大きな問題となっているのが民間借り上げ住宅だ。震災後、公営の復興住宅に入居できなかった人たちは、県や市が借り上げたアパートやマンシ

ョンに住み移った。その契約が20年で切れる。神戸市や西宮市は期限を理由に入居者を追い出そうとしており、行き場のない人たちに新たな不安や負担を押し付けている。長田区などの都市開発も失敗し、住民が住めない街、商売のできない街になってしまった。根本からの転換が必要だ。

――解決するにはどうすれば良いのか。

そもそも国や県が被災者のために恒久的な公営住宅を造らなかったことが根本的な間違いだ。被災者は避難所へ仮設住宅へ借り上げ住宅と何度も

力を合わせて

――「創造的復興」は被災者の生活にどのような影響を与えたのか。

大型公共事業への予算投入の一方で、財政難を理由に被災者・住民のための社会保障費が削られた。神戸市では、敬老パスの有料化や障害者への

一時金廃止、保育料・国保料の値上げなどが続いている。生活再建できていない被災者に二重の負担となって押し寄せている。「創造的復興」政策は東日本大震災にも引き継がれており、今後の影響が懸念される。

――復興を果たすためには何が必要か。

基本的には国の姿勢が問題だ。憲法25条に基づき、国民の生活や財産を守るという姿勢に立たない復興は進まない。大型公共事業などで大企業を支援すれば良いという政策では、結局は弱者が切り捨てられる。

震災後、被災地が連携して運動に取り組み、公的支援制度を積み上げていった。その経験を教訓に、社会保障充実の運動に結び付けていかなければならない。全国どこでも災害の可能性はある。力を合わせて国を動かしたい。



早いもので阪神・淡路大震災から20年になる。

震災当時、私は震度7の激震地・西宮に住んでいた。あの日は連休明けの早朝で、ちょうどスキーツアーの帰りだった。JR西宮駅前の広場に出

「復興」の意味を問う震災

新聞部・南端理伸

が直撃。電柱が次々と倒れていった。その恐怖は今も鮮明に覚えている。

今回の取材では、加藤擁一先生に話を伺う前に

援を求めて政府・自治体への要請に奔走し、立法化にこぎつけた経緯を聞いた。阪神・淡路大震災には適用されなかった

神戸の「人と防災未来センター」を訪れた。「17シアター」ではリアルな再現映像と音響で震

加藤先生からは、被災者・医療機関への公的支

「命を守る」「生活を守る」という被災者の尊い運動があったことを肝に銘じたい。

被災者を後回しにする政治のなかで、今も苦難は続いている。「生活再建なくして復興はない」との言葉に、「復興」の意味を改めて突きつけられた思いがした。



阪神・淡路大震災20年の特別企画展を開催中。大人600円、毎週月曜休館。(神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2、阪神「岩屋」駅から徒歩10分)



震災を語り継ぐ

「人と防災未来センター」

神戸市中央区にある「人と防災未来センター」は、阪神・淡路大震災の実相を生々しく展示し、災害への教訓を後世に伝える施設だ。国の支援を受け、2002年に兵庫県などが造った。国内外から年間約50万人が訪れるという。

コンピューター・グラフィックスで震災を映し出す「1

・17シアター」、被災した街並みを再現した実物大のジオラマなど、震災を疑似体験できるようにになっている。

約800点の展示品が並ぶ「震災の記憶」や、防災啓発コーナー、ボランティアによる解説など、震災を学び、防災を身近に感じる工夫が施されている。